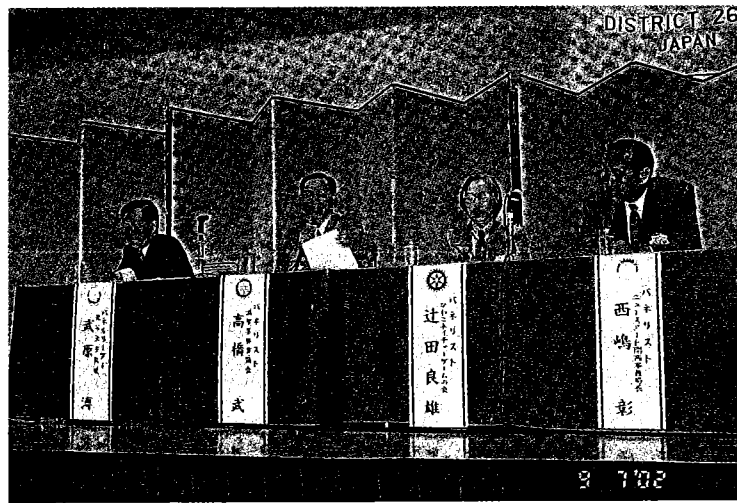


パネルディスカッション

テーマ「青少年に慈愛の種を播きましょう」

パネルリーダー	龍谷大学教授	武原 溥
パネリスト	滋賀県体育協会	高橋 武
パネリスト	びわこネイチャーゲームの会	辻田 良雄
パネリスト	ニュースタート関西事務局長	西嶋 彰
パネリスト	地区青少年委員長	森定 秀夫
司 会	大津唐橋ロータリークラブ	遠藤 紀



司会 進行役を仰せつかりました遠藤でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは「青少年に慈愛の種を播きましょう」をテーマに、パネルディスカッションを開きたいと存じます。

皆様方のご協力をよろしくお願いいたします。

それでは、改めましてパネリストのご紹介をさせていただきます。(省略)

それでは、武原先生、よろしくお願いいたします。

武原 本日いただきました「青少年に慈愛の種を播きましょう」というテーマは、ずっしりと重い意義を私には感じさせます。それは、21世紀に入りましたが、国際的に見ますと、テロや戦争の恐怖が高まっておりますし、国内的にはいつまでも不況が続いております。世界の先行きは必ずしも明るくなく、不透明でございます。

このような中で、未来を託す青少年のたくましく心豊かな成長を支えていきますことは、今や私たち国民の最大の課題ではないかと思うからでございます。ところが、慈愛の種を播く青少年の現状を見てみますと、そこにはいろいろと憂慮すべき状況があらわれてきております。

ご存じのように、まず、その第1に青少年非行、その発生でございますが、平成10年を頂点とする戦後第4のピークからいまだ脱出し切れていないということでございます。

そうした中で、学校内外では、生徒の暴力行為の発生が多発しております。文部科学省が調査を開始いたしましてからずっとふえてきましたが、平成13年は、全国ではちょっと減ったようですが、滋賀県は依然としてふえているということでございます。

校内暴力の中には、生徒間暴力と対教師暴力、

器物破損というのがありますが、ちょっと古いですが、平成11年の統計で、全国の中学生による生徒間暴力は発生数で1万3,692件でした。この数に対して、生徒たちの対教師暴力の発生数を見てみますと、これは4,144件、生徒間暴力、対教師暴力の比は実に3対1という数になっております。私には、これは本当に驚くべき数字で、こうした状況の中で学級崩壊とか、学校崩壊とかという深刻な状況が生み出されていると、こういうことがまず第1点でございます。

次に、青少年の憂慮すべき状況には、社会に溶け込めず、学校に行けない不登校児童・生徒の増加があります。この数も文部科学省が調査を開始しましてから10年間、ふえ続けております。平成13年度、小・中学校での不登校者の数は、全国で13万9,000人、特に中学生が多くて、率にしますと2.8%、36人に1人、40人学級では、全国クラスに1人以上の不登校児がいると、こういうことになります。

不登校児童・生徒につきましては、無理して学校へ行かなくてもよいという保護者の意見もありますし、それから、不登校はその後の人生に必ずしもマイナスではなかったという元不登校生の意見もありますので、その対応は非常に慎重を期さなければならぬと思っておりますが、この問題は今や我が国の教育上、極めて重要な、教師も親も、我々全員が取り組まなければならない課題ではないかと思っております。

それから、いま一点、豊かな人間性を育成するという観点からなんです、青少年の生活体験、社会体験、自然体験が非常に不足してきているということが指摘されております。

ベネッサの研究所というところが、小学生を対象にして、1980年と、20年後の99年に行った調査によりますと、金づちで釘を打ったことが

ありますかという質問に対して、よくあると答えたのは、1980年には22.6%ありました。ところが、99年には14%に下がり、3分2になったわけです。

同様に、この調査を見てみますと、自分でリンゴやナシの皮をむいたことがありますかというのは半分に下がりました。野外へ出てカエルをさわったことがありますかという経験は4分の1に下がっているわけです。

こうして生徒たち、子供たちの生活から実体験が減少してきている。その結果、自分で創意工夫をしたり、または一生懸命努力した後の充実感を味わったり、自然の中で感動することが非常に少なくなってきていると。

ほかにも体力の問題、頑張りの問題等々言われておりますが、今の青少年の中にはいろいろと問題点があるということです。

このような青少年を取り巻く厳しい環境の中で、国は平成に入りましてから、第3の教育改革と言われる措置をとってまいりました。そして、いよいよ今年からご存知の様に、ゆとり、生きる力、個性重視ということ 키워ドとして学校教育の改革が進められることになったわけです。

具体的には、学校週5日制完全実施、新しい学力観に基づく改定学習指導要領の実施ということになるんですが、この2つのことに関しましても、世間ではいろいろと疑問や質問が出てきております。学校週5日制の完全実施、それに伴い、教科書の内容を削減するという事は、子供の学力低下を引き起こすのではないかと意見が出されておりますので、ここで学校5日制ってどんな意義で、何のためにやるんやということをちょっと私の考えを申しておきますと、学校週5日制というのは、形の上では週休2日制とよく似ているわけですが、趣旨はかなり違う。週休2日制という



武原 溥
龍谷大学社会学部教授
経歴：昭和35年広島大学教育学部心理学科卒
26年間、郷里で高校社会科教諭
昭和61年滋賀県教育委員会で教育行政に係わる
安曇川高校校長、膳所高校校長
平成10年龍谷大学教授

青少年の非行や学力低下の問題が社会的に注目され、教育問題が国政上の大きな問題となっている現在、「教育は人となり」をモットーにまずは教育への熱い情熱を持って、その上に自らが豊かな心と変化に対応する学力を持った教師の育成が、今最も大切なことであると考えている。
現在大学で、将来中・高校の教諭を目指す学生に教育課程の講義を担当。

のは、今まで6日かかってやってきたことを能率を高めて5日でやって、休みを2日にする。しかし、でき上がった商品は、質も量も前とは変わらないのが原則だと思うんですが、学校週5日制というのは、学校で指導する内容は削減しても、子供たちを家庭や地域に帰して、自然体験、社会体験、生活体験などをふやして、実践的、創造的な学力と豊かな心を育てる、こういう趣旨ではないかと思えます。このことを、趣旨が違うんだということを教師も、父母も、地域住民も十分認識した上で、お互いの教育力を高め、協力し合っていくことが5日制成功のために大切なんではないかと思われま。

さらに、新しい学力観に立って、改定されました今回の学習指導要領の目玉は、総合的な学習の時間というのが新設されたことでございますが、この総合的な学習の時間といいますのは、今まで国語や社会などの教科の学習と異なりまして、国は教育内容や指導方法を国の立場から定めることはしない。教科書も出版することはない。運営は各学校の主体的判断に任せながら、子供たちの興味関心に基づき、テーマを選び、調査研究方法を選んで学習させる。

また、学習の場所は校内だけではなくて、地域社会にも出かけていき、必要に応じて外部から講師などもお願いして学習を進めていこうとするものであります。

この学習が小学校3年生から高校を卒業するまで10年間積み上げられていくわけですが、結果的に効果が上がるならば、若者たちが自主的で創造的な、いわゆる新しい学力を身につけることになるでしょうし、いろんな実体験を通しての感動を得、豊かな心を育成することになると思えます。

しかし、この学習が成功するためには、学校での教師の適切な指導というのは当然必要なんです

が、それとともに、地域の教育文化関係者、あるいは各界の専門家、伝統文化の継承者などがお互いに広い範囲で支え合い、協力し合って協力していただくことが大切なんではないかと思うわけです。

以上、今の青少年は非常に憂慮すべき状況にあると、そんな中で教育改革が進められていこうとするんだということを申し上げまして、たくましく心豊かな青少年の成長のために、国民挙げて支援協力していかなければならないということを確認いたしまして、私の最初の総括的な発言にかえさせていただきます。

司会 武原先生、ありがとうございます。

引き続きまして、高橋先生、よろしく願いいたします。

高橋 皆さんこんにちは。

今ご紹介いただきました高橋でございます。

非常にたくさんの諸先輩方の前で話をすることで、非常に上がっているというよりも緊張をして、足が振るっている状態でございます。私の持ち時間15分いただいているんですけども、まず、諸先輩方に何かお役に立てたらということで、一生懸命努めさせていただきます。

私のテーマはきょうは「地域でスポーツを通じて青少年の健全育成」という課題をいただきました。武原先生の話とダブるかもわかりませんが、子供たちにとっては、2002年4月8日からの週休2日制ということは、非常に大きな意義を持っていると思っております。

日本の学校教育制度は、明治5年に制定をされ、今日まで130年の歴史を持ってまいりました。昭和22年には6・3制が施行され、週6日制の学校教育が日本では実施をされました。本年度、子供たちは、5日がいいということが言われまして、

非常に文部省としては大きな決断ではなかったかなというように思っております。

私が中央で学校が2日制休みになると聞いたのは昭和57年です。それから約20年たって、本年度から週休2日制になります。その中で、週休2日制になった子供たちを地域で健全育成をやりなさいというようなことで、私も人生の3分の2以上、子供のがき大将をやってまいりました。それがスポーツを通じてという私のきょうのテーマでございます。

東京オリンピックが昭和39年に開催をされました。その2年前に、日本体育協会ができたのが50周年の記念で、オリンピックの記念に何か青少年に寄与できるものがないかということで制定されたのが、スポーツ少年団というスポーツの団体でございます。それを私が地道に地域で活動をやってまいりました。よく考えてみますと、日本の子供たちは非常に勤勉で通っております。それはそのはずで、ヨーロッパで子供たちが学校で勉強するを調べてみましたところ、フランス、アメリカ、この辺が1年間で180日、では、日本はといいますと（学校5日制になる前は）220日ぐらい学校で勉強をしてまいりました。それが4月から世界と子供たちと同じように180日から190日の学校の授業というふうなことで、非常に学校教育も変革をしてまいりました。

その中で、では、大人たちはどうなったかなといいますと、労働時間は今現在1,800時間の企業ではそういう運動をしております。1,800時間といいますと、8時間で割りますと、大体225日ぐらい、ヨーロッパでは、今1,600時間の労働時間に入っております。これは八時間にしますと、二百日ぐらいというようなことで、大人たちがそういう休みになった。では、子供たちはということで、多分、文部省の方では週休二日制にいったんではないかなというように思います。

私のスポーツに対する地域の話をしていただきますと、先ほど言いましたように、37年に日本の体育協会がスポーツを地域でやる子供たちを育てていこうということで活動を始めて、現在、登録しています日本の子供たちを見ますと、約百

万人ぐらいが日本体育協会に登録を見ております。

滋賀県で見えますと、13年度を見ますと、約2万人の子供たちが地域でスポーツ活動に活躍をしております。特に、子供たちの体育をする場所を考えてみますと、一つは、学校で習う学校体育でございます。小学校の授業のカリキュラムを見えますと、大体1週間に2時間ぐらいの体育に時間がございます。現在、子供たちの発育状況を見ますと、2時間ぐらいの体育では全くエネルギーが消費しないということで、非常に肥満体の子供たちが多く見られるようになってまいりました。そういう中で、我々は活動しているんですが、約3,500人のボランティアの指導者が登録して、各地で活動をやっております。

滋賀県で考えてみますと、50市町村でございます。その中で、49の市町村が日本体育協会に加盟して、青少年スポーツの振興を見ております。私、大津の瀬田に住んでおるんですが、私が預かっている地域の子供、2百人おります。その中でサッカー、バレー、野球、ラグビー、剣道、バスケットの6つやっているんですけども、指導者が四十数人いてくれるんですが、ほとんどサラリーマンで、土曜、日曜を地域の子供たちに活動をやっておるといのが現状でございます。

その中で、子供たちの変化を考えてみますと、非常に社会の変化も多く見られております。特に、運動不足が本当に多く見られております。私、昭和19年の生まれですので、58歳になるわけですけども、私も子供二人おります。この二人を考えてみますと、特に感じるのは、交通機関の発達、電化製品の文明化ということで、非常に子供たちの運動不足が目立ってきているのではないかと思います。

二つ目には、情報網が非常に発達して、メディアが子供たちを時に悪い方向に導いているのではないかなと、趣味が多くなったり、多種多様化が進んでいる。今の子供たちに非常に悲劇なのは、遊びの空間が非常に少なくなってきたということでございます。

私の小さいときを考えてみますと、親が呼びに来るまで外で遊んでいたという時代から、今は遊



高橋 武
東レ㈱医療用具生産部勤務
経歴：文部科学省認定少年スポーツ上級指導員
日本体育協会公認体力テスト判定員
日本スポーツ少年団認定育成指導員
滋賀県体育協会理事

スポーツを通じて青少年の健全育成、つまりスポーツ好きで、元気で明るい子供の育成、又その環境を整備する必要がある。人格形成をも狙った教育的な配慮に基づく発育発達期にある子供たちの健康な「からだところ」を育てることにある。スポーツ活動を通じ、心の健康を取り戻させるには、どのような活動プログラムが必要かつ有効か、協力の在り方を考える。

ぶ場所がないので、外で遊んだら危ないということで、子供を家の中に閉じ込めるというようなことで、運動不足になりがちなお子さんたち、そして、先輩後輩の関係が薄れてきているのではないかなというように言われています。

それと、核家族が非常に進んでおいて、地域社会の交流が薄れているのではないかなと、そして、大きく取り上げているのが少子化でございます。その子たちに非常に期待をかけ過ぎて、子供たちがつぶれていっているのではないかなということでございます。

その中で、子供たちの変化が大きく見られるのは、体が非常に大型化してきました。成長のスピード化が進んでおります。その割には運動不足が非常に目立ってきているのではないかと、運動能力の変化ということで、身体保持の筋肉が低下をしてきておる。そのために瞬発力とか、爆発力が非常に低下をしておる。それと同時に、運動機能の低下が非常に叫ばれております。背は高くなるんですけども、骨格がついていかない。運動しないので反射神経が低下している。それと、少子化のために親が過保護にし過ぎて、社会経験不足が起こっているのではないかと。その反面、教育の過熱化が進んで、子供たちの自由時間が減少しているのではないかなと言われております。

それと、遊びの変化が子供たちに非常に悪い方向に進んでいるのではないかと。といいますのは、外の空間がなくなったために、子供たちは部屋でゲームをして、非常に少人数でしか遊ばないということでございます。

それと、子供の時代からプライベート化している点、親としゃべるんでなくして、ご飯食べた、もう自分の部屋を持って、そこで一人生活をする、我々には考えなかった時代に差し掛かってきております。そして、社会の関心事が重大になってきて、理想と願望は大きいんですけども、熱意が子供たちには低下をしているのではないかなというようにございます。

一方、スポーツの環境を考えてみますと、企業スポーツが破壊を見ております。企業で持っていたバレーとか野球、その辺が社会不況のためにほ

んど企業が手を離れてまいりました。

それと、一方では、プロ化が進んでおります。プロ化になりますと、金銭がついて回るというようなことで、非常にスポーツの環境が変化してまいります。特に、今年のワールドカップなんか見ますと、国中が一時期は燃えたんですけども、終わってみると、では、何が残ったんだろうなということで、商業ベースに乗っているのではないかなというように、青少年がスポーツが大人のスポーツに巻かれてきているような現状が多く見られております。

その中で、地域で子供たちを教えているのですが、大体5人に1人が地域でスポーツの活動を見ておるんですけども、所詮、我々がやっているのは土・日の余暇時間を利用して、子供たちに教えておるわけでございますが、非常に親の期待が大きいです。初め預かるときなんか親としゃべってますと、プロ野球の選手になるように指導してください。お願いしますというように、非常に期待の大きな親御さんがおられます。我々がやっているのは、やっぱりスポーツを通じて子供の体を鍛え、心を鍛え、地域に柔軟に対応できるような社会勉強の一環でやっているんですけども、そういう親御さんが非常に多く見られてございます。

日本のいい指導者像を考えてみますと、いい選手を育て、また、いいチームをつくって大きな大会に優勝した指導者が褒められるというような悪い環境にあるのではないかなというように思っています。

我々地域でやっているのは、一人でもスポーツ嫌いを少なくして、生涯を通じてスポーツをできる子供たちを育成するのが目的で活動しております。子供たちの健全育成をスポーツを通じて行ってまいってきておりますが、余暇の時間を利用して、子供たちに一人でもスポーツを教えていくというのが我々の使命だというように考えております。

平成12年8月に、文部科学省からスポーツ振興基本計画が示されました。それをもって、本県でもスポーツ振興の現状というように調査をしてみますと、子供たちの遊びの変化が非常に

多く見られてきております。一つは、中学校の部活の場が非常に減ってきているということ、問題になってきておりますし、非常に中学校の子供たちの体力低下が見られております。中学校で指導する先生方の高齢化もして、だんだん中学校のスポーツのクラブが衰退しているというように調査が滋賀県でも出てきております。子供たちのスポーツを通じての環境整備が、今後大きな問題になってこようかというように思っております。

滋賀県も2010年までのスポーツ振興策をまとめて、その中に見てみますと、健康なスポーツを青少年に育成をしていきたいと思います。二つ目に、スポーツだけではなくて、遊びを入れた簡単にできるスポーツも必要ではないかということ。そして、地域のコミュニケーションを通じて、子供たちに少しでもふれあいを通して、また、スポーツを通じて楽しさを共有しようというように運動も今後必要であって来ないかなということが言われております。

また、スポーツができない子供たちをスポーツをできるように、やはり地道に学社連携をとりながらやっていく時代を迎えているのではないかなということ。そして、スポーツ嫌いの子供たちを少しでも運動ができる環境を整備する振興計画も必要になってこようかというように思っています。

それと、やはりスポーツですから、勝負が必ずついて回ります。その中で、いい選手も育てていけないかと言いつつも、やはり心身を鍛えながら、一生健康で生活できるような体づくりも大きなハードルではないかなというように思っています。

それともう一つ、スポーツができなくてもスポーツを愛している人たちが、ボランティアを通じて何らかの支援ができないかなというように

ことも重要になってくるのではないかなというように話もわいてきておりますし、また、滋賀県では競技場がありませんので、余り見るスポーツができない。野球場もないし、サッカー場もないしというようなことで、やはり本県でも見て楽しむ、見るスポーツの環境整備も必要になってくるのではないかなと。青少年にいい場所の提供、燃えるものは何かないかなというように言われております。特に、見るスポーツということで、青少年が一流のプレーヤーのプレーを目の当たりにして、スポーツを積極的に取り組む態度を育成ということも我々の大人の一つの役目ではないかなというように思っております。

特にロータリーさんにおきましては、各地で青少年スポーツのご支援を多々いただいておりますが、今後とも、青少年のスポーツ育成に多大なご支援とご協力をお願いして、終わらせていただきたいと思っております。

どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございました。

パネリストの先生方、一人15分が物足りなくて長時間にお話しいただきましたが、続きまして、辻田先生、よろしく願いいたします。

辻田 皆さんどうもこんにちは。

私、ネイチャーゲームという、びわこネイチャーゲームの会の代表をさせていただきます。

皆さんお疲れやと思うんですけど、私も学校の教師をやってますけど、ちょうど五時間目の授業の時間違うかなと、そんな雰囲気がちよっとあるんですけど、そんなことも考えながら話させていただきます。

私のことが少しでも皆さんのお役に立てればいいかなというふうに思います。きっとほとんどの方がまだネイチャーゲームという言葉をご存じで



辻田 良雄
日本ネイチャーゲーム協会中級指導員
びわこネイチャーゲームの会代表
大津市打出中学教員

私の活動は、いろいろな機会を通して、子どもや大人と一緒に自然の中で体験活動出来るように支援することです。この活動を通して、活動を行う前と終了してからの参加者の顔の表情が大きく変わることです。やはり、自然の中での遊びは私たちにとっ

て大きな意味があることに気付かれます。考えてみますと、川の水の冷たさや美しさという感情は子どもの時代に多くの仲間と川で遊んだことで手に入れました。この事は今の子どもたちにも言えるのではないのでしょうか。体験にもとづいてこそ感情や知識は生きてくると思います。でも、今の子どもたちを取り巻く環境はどうでしょうか。この事を少しでも改善し、子どもたちに自然の中で遊ばせたいというのが私の思いです。

はないと思います。私も滋賀県でやりまして、大体十年ほどやっているんですけど、身近な公園でやっています。ここ県内各地から来ておられるんですけど、大津だと長等公園とかふれあいの森、そして、甲西町の方では青少年自然道場とか希望ヶ丘とか、そして、彦根ですと、子供の国のところとか、そして、先日はタカトリ公園ですが、あこでもやらせていただきました。そして、高島郡の方では朽木のふれあいの森とか、そういうところであちこちでやらしていただいているんです。多分まだ皆さんの中にはネイチャーゲームって何やっとなのやということでお考えやと思うんです。簡単にちょっと紹介しますと、例えば百幾ついろんなゲームやらあるんですけど、その一つで、木の葉を使いましてかるた取りをするというようなことをやるんですけど、皆さんだとういうイメージをわかりますかね。かるた取りは皆さんご存じやと思うんですけど、それを2枚の同じ種類の木の葉を取ってきまして、1枚を指導者が持って、もう1枚を参加者、大人も子供もいるんですけど、その中で指導者が出した木の葉を参加者が二つのチームに分かれてそれを取り合うということをするんです。レクリエーションとして悪くないと思うんですけど、それだけで僕らの活動は終わらない。ここにも紹介していただいたんですけど、自然保護、環境教育というふうに言っていたんですが、最終の僕らの目標は自然ということにあるんです。では、それが何で自然保護、環境教育につながるのやということだと思わんですが、やっぱりそのところで葉っぱをさわったり、取り合うということによって、その葉っぱにいろんな種類があるんやと、においや手触りやら全然違うんやと、そういうことを気づいてもらうということなんです。そんなこと何しとんのやと、皆さんのことやったら、そんなこと昔から知ってるわいというようなこと、皆さん、私たちの世代やったらそういうことなんですけど、今の子供たちにすると、これが非常に大事なことに繋がってきているんです。その辺のところから私自身がこういう10年間やってきて、今の子供たちに何が足りないのか、非常にいい場面もあるんですけど、

れど、自分自身やっぱりどんなことをこれからやっていったらいいのかという二つ気づいたことがあるので、それを話させていただきます。

一つは、今話の中でもあったんですけど、自然体験活動の少なさというもの、これはやっぱりすごく感じます。私の世代なんかでもまだ川の中で泳いだという経験を持っているんですけど、今の子供たち、自分の子供もそんなさせたいなと思いますけど、しないですよ。そこで、では、何を得たのかというのを今ずうと振り返ってみて考えてみると、何か川の水の冷たいというのを言葉と体験というのが非常に結びついてきたというのが自分今思うんです。私、中学校の国語の教師やっているわけなんですけど、その中で小説なんか読んでいますと、植物なんか出てくるんです。ススキというのが時々出てくるんですけど、私たちの世代だったら、当然、ススキというのは十分知ってることなんです。一度は指を切った、今すぐイメージがぱっとわいてくるんですけど、中学生の中でもススキといっても出てこないですよ。私の勤めている学校の近くもほとんど田んぼやらそういうのがないんですけど、ススキはあるところはあるんです。さわればあるのはあるんですけど、自然の中に関心のないという子供たちにとっては、もうそれは単なる草ですよ。私たちにとっては、そのススキがそれを使って遊んだというようなイメージに結びつくんです。では、それがどうなんやということなんですけど、私気になるのは、言いましたように、言葉と情報とかということと体験が結びついてないということは、非常に考え方や、言葉が非常に薄っぺらくなっていく違うかなというのを感じます。今の子供たち、やっぱり情報社会と言われてるように、本当に子供、情報たくさん知ってますよね。その中で、やっぱり体験と結びついてない情報というのが非常に怖いというのが思うことです。いろんな今事件で思うんですけど、やっぱり死というのが今の子供たちにはどういうふう言葉と入っているのかなというのを考えると、ちょっと空恐ろしいなというのを感じるところです。それが一つです。

もう一つ感じるのは何やいうたら、やっぱり人と人とのつながりというのが非常に薄くなってきているなというのを感じます。何でそんなことを感じるんやというたら、例えば2時間ほどの活動をやるわけなんですけど、始める前と終わった後、その顔やら表情が非常に違うわけです。やっぱり終わった後というのは非常に満足されて、たった2時間ほどのことなんですけど、特に変化の激しいのは大人の方なんですけど。お父さんはなかなか参加されないけど、一番喜ばれるのはお父さん、喜んで最終的にはやっておられるんです。その辺考えていくと、知らない者同士が当然集まってくるわけなんですけど、感想なんかにも時々書いてあるんですけど、参加させてよかったと、初めはどうなるかな、みんなの前で果たして遊べるかなというのが心配やけれど、2時間一緒に遊ばせてもらってほっとしましたという、これ非常に象徴的な言葉違うかなというように思うんです。お母さん、若い親の方も自分の子供をそういう中で遊ばせたいというのは非常に持っておられるのやけれど、どう遊ばせたらいいのかわからんというのが正直なところやと思うんです。そこへ参加させてもらって子供も一緒に遊べるというのがわかって非常によかったというのを聞いていますと、やっぱりうれしいですね。僕らもNPOでやっているわけなんですけど、最終的にその喜びというのか、その顔見て自分らのエネルギーにしているん違うかなというのがつくづく思うところなんです。皆さんも同じ活動をやってそういうことやと思うんです。そのことを考えて、人と人とのつながりというのか、その辺のところをもっとも僕ら考えていかなあかんというのが感じるところです。ほかにもいっぱいいろんなことを考えられると思うんですけど、その中で、私としては、では、何ができるんやということ

考えていったときに、私の夢でもつながるんですけど、この後、大場さん講演されるんですけど、大場さんは冒険学校をつくってやっておられるんですけど、私自身も小さなものでもいい、身近なところで、滋賀県でいいかと思うんですけど、そのところで自然学校というのをつくってみたいですね。やっぱり子供たちが自然の中で群れて遊ぶ、この鮮れて遊ぶというのが大事やと思うんです。一人が選ぶということではなくて群れて遊ぶこと、このところが僕非常に大事やと思うんです。そういう子供たちの自主性を十分に生かした、そういう活動をやっているような自然学校というのが自分自身つくってほしいなと思います。別にハードなもの、建物とかそういうことではなくて、1日、2日集まって、その中で子供たちと一緒に親も遊べると、そういうもんをつくれへんかなというのが今の私の夢です。そんなことを考えながら、滋賀県内で活動をやっているということです。また、あちこち滋賀県内へ行きますので、その節にはぜひまたよろしくお願ひしたいと思うんです。

どうもありがとうございました。

司会 ありがとうございました。

それでは、西嶋先生、よろしくお願ひいたします。

西嶋 西嶋でございます。

私は、プロフィール書いていただいているんですけども、大阪でNPO法人ニュースタート事務局、若者の社会的引きこもりというんですけども、それを支援する活動をやっています。

武原先生、高橋先生、辻田先生、それぞれ子供のいろんな憂慮すべき状況みたいなものをどう克服していくのか、それぞれのお立場でご活躍です。先生方おっしゃったのは、子供たち一般についてなんですけども、私の方は憂慮すべき状況の中で



西嶋 彰

NPO法人ニュースタート事務局・関西代表
シンクタンク株式会社エスシイアイ代表取締役
1944年 大阪市生まれ
1964年 京都大学法学部入学(中退) 広告会社勤務を経て、
シンクタンク株式会社エスシイアイ設立、教育問題などの
研究評論活動他に協同組合関西ブレインコンソーシアム
副理事長

1999年～ニュースタート事務局・関西代表として研究会など主催。
大学生の不登校や若者の引きこもり問題に取り組む。現在、
高槻市内に若者の共同生活寮を運営する他、ホームページ
<http://www.5b.biglobe.ne.jp/newstart/>で引きこもり相談に応
じ、引きこもり問題に論じる。著書に『引きこもりは病気で
ない』(ニュースタート事務局関西)、共書に『今時の
子どもはこう考えるI・II』(日本経済新聞社)など。

も特に社会的引きこもりというのが随分ふえてきていまして、これは厚生労働省なんか随分関心を持ち始めているんですけども、一説によると、100万人を超えているというふうに言われているわけです。引きこもりというのは何なのか、特に、社会的引きこもりというふうに、社会的とついているんですけども、それをある精神科医で、齋藤さんという方ですけども、こういうふうに定義されています。20代後半までに問題化し、6ヶ月以上参加せずに自宅に引きこもり、ほかの精神障害を第1の原因としないものという、そういう定義をされています。つまり、社会的というのは、単に自宅に引きこもっているというだけでなく、社会参加をしないという点が特徴なんです。社会参加しないというのは、15歳から大体25歳ぐらいまでに始まるわけです。40歳ぐらいまで続く人もいますけどもね。それで、その時代に社会参加しないということは、つまり、学校に行かない、あるいは仕事をしない、就職しない、そういう状態の子供のことを言います。ただし、最初に武原先生のお話しの中にありましたけども、いわゆる単なる不登校、学校に行かないというだけの状態のことは指しません。学校に行かないだけではなくて、友達づき合いもしない、そういう子供が多いわけです。

自宅に引きこもっている子供の中には、深夜にコンビニへ行ったりとか、そういうことはできる子もいますけども、中には、自宅というよりも自室から出てこなくて、それで、親とも口を聞かない。親に何か用事があるときにはメモ用紙みたいなものに用事だけ書いて渡すという、そういうほとんどコミュニケーションができないような、そういう子もいます。親の方もメモを受け取るんですけども、まともに私は何々がしたいから、これこれを買ってきてくださいというようなことは書いてないわけです。用件だけ書いてある。ある女の子なんですけども、親に書きメモに、PS2と書いてあるんです。ここにいる方は大変わかるのかわかりませんが、そのお父さん、お母さん、余りそういうことご存じないんで、PS2という一生懸命考えて何だかわからない。ついに私

のところに相談しに来て、それはプレイステーション2というゲーム機のことですよ、お子さんはプレイステーション2というのを買ってほしいという、そういう意味ですというようなことを教えてあげたりするわけですけども、それぐらい親とのコミュニケーションも全くできないというような状況の子供が多いです。

なぜこういう引きこもりがふえてきたのかということなんですけど、この辺の解釈は人によっていろいろ違いますんで、ここにいらっしゃる方の中でも、私が申し上げたら、それでは違うだろうという方もいらっしゃるかわかりません。

一つは、ここにもお医者さんたくさんいらっしゃるんですけども、精神科医の方とか、それからカウンセラー、心理学ですね。臨床心理学勉強した方の引きこもりについてのとらえ方と私たちのとらえ方かなり違います。精神科医の方のところへ行きますと、当然、うつ病とか、あるいは不安神経症とか、そういった病気を疑われて、薬を処方されるわけです。薬を処方されること自体、私は反対してないんです。それで気分がよくなって治ることもあるんです。ただ、引きこもりには引きこもりの原因がありますから、単に気がふさいでいるとか、そういう状況だけではないんです。その状況の方を取り除かないと治りません。カウンセラーの方は心理的な病気だと、心理的な傷だというふうを考えて、それを治療しようとする。だけど、カウンセラーというのは、大体患者さんの気持ちを受け入れてあげなさいか、あるいは永い気持ちで待ちなさいとか言われるわけです。ところが、この引きこもりというのは、長くずうっと持っていると、我々の経験では最長25年間ぐらい引きこもる。15歳ぐらいの子が40歳になっちゃう。40歳ぐらいになったら、自動的に引きこもりから脱出できるんですけどね。

昔私の中にも、3年寝太郎とか、物臭太郎とか、そういう仕事しないで寝ころがっていると、そういう人は昔からいたわけですけども、最近のことで急増している状況を考えたら、私は1991年、バブルの崩壊によって、今の引きこもりというのは大量に発生し始めたというふうに考えてます。つ

まり、中学生、高校生、受験勉強のプレッシャーで引きこもる子供が多いわけですけども、受験勉強なんていうのは我々の時代からやってたわけで、それ自体は引きこもる理由にならないわけです。なぜ今の時代引きこもるのか、つまり、出口のない状況の中で無駄な競争をさせるからだというふうに考えてます。むだというのはちょっと難しいですけど、出口がないというのは、若者たちが受験勉強をして高校に行き、大学に行き、あるいはいい会社に入ろうとするわけですけども、バブル崩壊後、当然ながら失業率がふえて、それまで立派に働いていた人まで仕事を失うと、そういう状況です。ことしの高卒の有効求人倍率、ついきのう、おととい新聞に出てますけども、0.5です。つまり、高校卒業しても2人に1人は仕事がない。そういう状況の中で、親は一生懸命勉強しなさい、いい学校に行きなさいというふうに押しつけるわけです。子供たちにとっては、勉強するのはいいんだらうけども、そこから先どうやって社会に貢献して、社会に参加するのか、そのイメージが湧いてこないわけです。

こういう厳しい経済状況のせいにしてしまうのがないわけですけども、ただ、こういう状況の中でも引きこもりになりやすい子と、それから、そうならない子がいます。なりやすい子というのは、いわゆるまじめなおとなしい、ただし、非常にプライドが高い、そういう子が引きこもりになりやすいんです。引きこもりというのは、私が今言いましたように、決して親の育て方が間違ってるから引きこもるというわけではなくて、今のこういう社会状況だからやむを得ず引きこもるわけなんですけれど息子や娘を引きこもりにしてしまいやすい親御さんというのもしらっしゃるわけです。どういう人かといいますと、これも親もまじめなんです。まじめな人の親しか引きこもりになりません、極端に言えば。もう一つ言うと、世間体を気にする人です。世間体気にしながら子育てでなんかしないでほしいなと思うんですけども、そういう人の子供さんが引きこもりになりやすい。その事例を少し言いますと、事例って具体的ではないんですけどね。

子供に他人に迷惑をかけるな。他人に迷惑をかけたなら何しても構わないから他人に迷惑をかけるなと、これをよく言う人が多いです。ほかにも私たちは引きこもったり、不登校の子供たちにこういうことを言うてはいけないというふうに言ってる言葉は幾つかあるんですけども、その中でも特に「他人に迷惑をかけるな。」

それからもう一つは、「うそをつくな。」これ両方とも当たり前のことですから、他人に迷惑をかけるなとか、うそをつくなとかというのは当たり前のことだから、それを言うてはいけないとは言いませんけど、ただ、今の社会状況中で子供に他人に迷惑をかけるなとか、うそをつくなとかいうことを過剰に言い過ぎると、子供はどういう反応をするか。つまり、他人に迷惑をかけるなということは、他人も迷惑をかけてくるから、自分も迷惑をかけられないようにしなさいと、つまり、用心しなさいと、こういうふうに言ってるわけです。

他人にうそをつくなというのは、世の中うそつきばっかりだからだまされるなよって、こういうふうに言ってるんです。実際、もちろんこういう不況ですから、わけのわからない詐欺商法みたいなものを持ちかけてきて、普通はそんなひっかからないんですけども、自分がもうけようと思ったらすぐにひっかかるわけです。

だから、結局、今言った他人に迷惑をかけるなとか、だまされるなというのは、人を信用するなというふうに言ってるんですよ、子供に。人を信用しないで、人を出し抜くぐらいで、遊んでる間に勉強していい学校へ入ると、こういうふうに教えているんです。だから、引きこもるといのは極端ですけども、引きこもるのは単純に、いろんな失敗とか、受験勉強の失敗とか、あるいはスポーツ活動をやっても、勝つことを目標にしてやっても、負ける場合だってあるわけですから、何かそういうのをきっかけに引きこもっちゃうんですけども、そのときに人を信用するなというのを教え込まれてたということは物すごくきいてくるんです。対人恐怖、人間不信になる。その根底には自分自身に対する不信感というのが物すごい

あるんですけども、だから、余りここでは詳しい事例は申せませんが、ある意味で我々は貧しい時代を生きてきましたけども、結構楽しくも生きてきたんですけども、今の若い子供たちに物すごい虚無主義、ニヒリズムみたいなものがあって、それで他人を信用しない、それで外へ出てこれない。

どのように人間を信じられるのか、人間関係をつくれるのか、友達をつくれるのか。引きこもりの子というのは、定義にも私はつけ加えているんですけども、友達がいないんですよ。もともと友達がいないわけではないんですけども、引きこもったら友道を拒否してしまうんです。我々は、では、どうしたら引きこもりの子を引っ張り出していけるのか、やはりいったん引きこもりを肯定してあげることではないかなと思ったりします。引きこもってること自体いいのではないんですけども、ただ、やっぱり引きこもり、今の社会に対する不信感を持ってますから、その不信感はある意味で当然ではないかなというふうに肯定して、それで、同じような悩みを持って人同士、我々は鍋の会というようなことをやっていますけども、鍋の会というのは何やってるかといいますと、単に集まって鍋料理を食べるというだけです。ほとんど一年間鍋料理食います。あしたもやるんですけども。要するに、今の若い子供たちは、他人と一緒に飯を食う機会なんかないんですよ。だって、人間信用してないんですから、他人と一緒になんか飯食えないんです。そういうことから始めて、人を信頼するというのを学ばせようとしています。

それから、きょうのテーマであります慈愛を播くですかね、慈愛というのは何だろうかというふうに我々もいつも考えてます。

一つは、出口のない、出番のない今の若い人た

ちに対して役割を与えることが最大の慈愛なんではないかなと、働きがいのある仕事を与えるというふうに言ってもいいんですけども。それが最大の慈愛ではないかな。そのことによって、生きていく力みたいなものを確信させる。このままでは、若者は大人から見れば引きこもりというのは怠けるように見えるんですけども、怠げざるを得ないんです。する仕事がないんですからね。だから、皆さんそろそろお年の方もかなりいらっしゃいますから、仕事を適当に切り上げて若い人に譲ってください。よろしくをお願いします。

司会 ありがとうございます。

それでは、森定委員長、よろしく願いいたします。

森定 最後のバックになりました地区青少年委員の森定でございます。

日ごろ皆さんには地区の青少年活動に深い理解とご指導を賜りまして、深く感謝しております。改めて御礼申し上げます。

きょうのテーマである「青少年に慈愛の種を播きましょう」ということですが、ロータリーの地区青少年活動と役割について、総論でございますが、少し話させていただきます。

若者が道徳、倫理観をしっかり持って、自分も大事にし相手も大事にして、自他ともに組織し合えるよい社会を築くために貢献できる人をつくるということ、つまり、地区の社会奉仕を通じて人材育成することが、この青少年委員会の目的でございます。

さて、新世代を担う青少年の育成は、私どもに課せられた重大な課題ではありますが、ロータリアンの会合でも、自分の子供を育てるのに精いっぱいなのに、ほかの人の子供までとてとも言います。ロータリアンの多くの人々は、青少年の指導に関してほとんど素人でございます。学校教育の

場で、青少年の教育に当たったロータリアンは少ないとしても、これは社会教育という青少年育成とは少し異なった立場であるはずで、このことは私たち十分に認識しておく必要があると思います。すぐれた教育者が常にすぐれた青少年指導者ではありません。すぐれた教育者になるためには深い学識と高い人格がまず期待され、師としての威厳といったものが要求されますが、青少年指導にはこのような要件は必ずしも必須ではないと思います。むしろ彼らの先輩として、ともに学び、ともに実践し、ともに対話することにおいて、喜びも悲しみもお互いに分ち合うというスタンスが望まれるものであります。

この意味で、私はよきロータリアンはすべて青少年指導者たり得る素質があると考えております。でも、素質があるだけでは十分ではありません。各ロータリアンは青少年の模範というスローガンがロータリアンの青少年の奉仕のモットーであります。さらにすべてのロータリアンは青少年の指導者としての心構えと知識を身につける必要があります。この9月の月間には、新世代のための月間ということで、このスローガンを例会場に掲げていただき、会員の皆様方にご理解を求めています。

したがって、手続要覧の第8章、新世代のためのロータリープログラムの推進を図るために、新世代のための会議を地区内全93クラブで開催を求めています。昨年は63クラブで開催されました。

第2番目には、大変なエネルギーと時間のかかる地区のRYLAです。来年5月ごろに予定しております。RYLAは若い人たちを対象に、地域社会における青少年指導者としての資質の向上と善良な市民としての責任を啓発し、限られた時間内で指導力を発揮する技術、さまざまな分野の知識の吸収、積極的に行動する習慣、自主性を発揮することなどなどの向上を目的としております。

当地区における新世代のRYLAのプログラムは、地域の中で、将来、指導者の役割を果たしていこうとする新世代の若者とロータリアンが2泊3日の研修の中で、お互いに連帯感、思いやり、

同じ目線で語り合い、真の人間関係を築くということを目的としております。昨年も参加した受講生の多くが、再度RYLAに参加したいという申し出がたくさんきております。

第3番目には、国際RYLAの参加でございます。今年度もRYLAの受講生の中から1名選出して申し込む予定でございます。

以上が青少年活動の概略でございますが、先ほど来から先生方の各論をいろいろお話いたしましたので、私どももこの機会にぜひ先生方を交えた今後の討論会になることを期待いたしまして、甚だ簡単でございますが、これで終わりたいと思います。

よろしく願いいたします。

司会 森定委員長、ありがとうございます。

非常に進行役の不手際で時間が相当おくれておりますので、ここで皆さん方のご質問を承るのが常套かと思いますが、先に進ませていただき、



最後に皆様方のご意見を聞きたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

パネリストの先生、どうもありがとうございます。

それでは、県下各クラブにアンケートをお願いし、ご回答をいただきましたことを感謝するとともに、各クラブの取り組みの一部をご紹介いたします。

取り組み方はいろいろございますが、その分野はスポーツが一番多く9クラブ、文化活動が5クラブ、インターアクト、環境問題、国際交流の順になっておりました。

最後のアンケート結果報告は、時間の関係で非常に申しわけございませんが、割愛させていただきます。



森定 秀夫
2650地区青少年委員会 京都西北ロータリークラブ所属
(有)青見地所 代表取締役社長

「各ロータリアンは青少年の模範」の標語の意味を真剣に考える必要があります。これはまずロータリアン自身から始めること。つまり自分自身を変えることを意味します。青少年とのかかわりあいは、先ず自分自身を変えることから始まるのです。これは他

の誰の助けも借りずに出来る仕事です。そうすれば自分を越えた眼で近隣あるいは社会の、そして世界の若者をみることが出来ます。

青少年問題の原点が「家庭教育」の不足であり、「家庭教育」は「心の教育」として注目すべきです。家庭教育は親の行動が基となるものです。新世代の青少年が何を考え何に関心を持ち、悩み、訴えたいか、その新世代の声を聴く機会を作る場を提供し、ロータリアンと同じ目線で対話することが大切なことです。

きます。冊子に載せておりますので、ご参照いただければ幸いと存じます。

それでは、ご回答いただきました中から、代表として4クラブにご発言をお願いしたいと存じます。

最初に、彦根ロータリークラブ幹事片岡哲司様、よろしく申し上げます。

片岡 彦根ロータリークラブの片岡でございます。

どうかよろしくお話をいたします。

私どもは、青少年に関しての取り組みということでお話をせよということでございますので、させていただきます。

当然のことながら、私どものクラブでは27年前からローターアクトクラブを持っておりまして、ともにいろんな形で共同奉仕、交流を進めていこうということでございます。

また、本年度で第27回目になるんですが、少年サッカー大会、ことしは10月12日にさせていただきますわけですが、小学生の参加のもとで開催をさせていただいております。

また、ことし新世代のための会議につきましては、9月の末に、宇宙飛行士の若田さんを迎えまして、宇宙ステーションの建設に参加してということで、彦根市内の小学生1,200名をお迎えをして、講演会をさせていただきます。またその後、それぞれのそういった部分にお話を聞いていただいた後での作文を募集をやっていこうというふうになっております。

また、各委員会ごとでということやなしに、青少年の問題に対してということで、職業奉仕委員



会の方でも、我々ロータリアンはそれぞれ専門分野を持っておりまして、高校生の各学校で今折衝をしておるんですけれども、我々の専門分野を聞いていただくというふうな型を学校のカリキュラムの取り入れていただいてというふうな交渉を今させていただいて、多分2月にはできるんじゃないかなというふうに思っております。

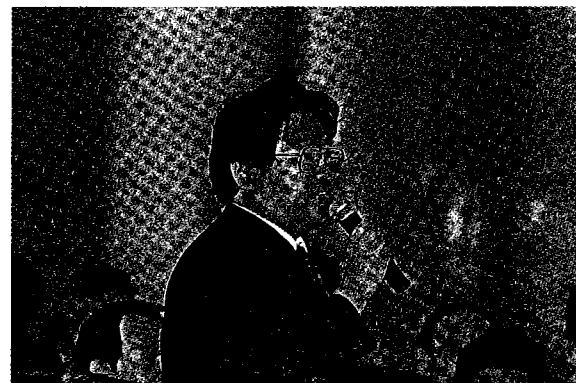
司会 ありがとうございます。

続きまして、八日市南ロータリークラブ青少年奉仕委員長の西野勉様、よろしくお話をいたします。

西野 八日市南ロータリークラブの西野です。

先ほどからのお話の中で、武原先生がおっしゃっておられましたけど、学校5日制、子供たちを地域に帰して、地域の教育力と家庭の教育力で生きる力を育てようということで始めました。

そこで、先日、我がクラブの方で地域の7中学の生徒会役員の方からアンケートをとりましたところ、その中に、スポーツとかいろんな音楽とか、芸術、いろんなサークルがあると思いますが、そのサークルがどんなのがあるか教えてとか、どんなボランティア活動されているか教えてというような内容もございました。



そうしてまた、地域社会にはいろんなことでの経験がされている方がいらっしゃると思います。野球、サッカー、園芸、料理、そういうのを子供たちに教えてみたいと思っておられる方もたくさんおられると聞いております。ところが、その結ぶ接点がございません。そのような方々を集めてちょっと勉強してもらって、そして、学校や地域のサークル、子供たちの前に出せるような人材バ

ックみたいなのをロータリークラブの方で、県下全体で協力し合わなくてはできないと思っておりますが、そのようなセンターみたいなものをつくって、子供たちに提供できたらなど、そのような活動がロータリーの活動としてできないかなと提案いたします。

司会 ありがとうございます。

それでは、続きまして、水口ロータリークラブの幹事中村瑛一郎様、よろしくお話をいたします。

中村 失礼いたします。

私どもの水口ロータリークラブ、今、少年サッカーの試合を主催をして、ことしで25年になります。考えてみますと、当初、25年前、なぜこういうふうな少年サッカーを主催したかなということをおもひかえってみますと、そのころ、水口は小学生、それから高校、結構サッカーが地域として強かったんです。元横浜マリノスの井原選手がちょうど小学校に在学をしていたころではなかったかなというふうに思うんですけれども、小学校も県下では有数の強いチームでしたし、高校は今の水口高校、元の甲賀高校ですけれども、そこも全国大会に何度か出場をしていました。

そういうふうな地盤がありましたところで、ロータリークラブとして何かできないかなということで、こういうふうな少年サッカーの試合を主催するというふうなことになったんかと思うんですが、これから25年たちました。そうしますと、少し水口クラブの中でも状況は変わってきております。例えばいつまでもサッカーばかりではないだろうというふうな声も出ておりますし、もう少し文化的なことに取り組んでもいいんじゃないかなというふうな声も出ております。まだこれについての結論は出ておりませんが、やはり25年という間に少し考えが変わってきたかなというふうにも思っております。

サッカーを続けるにしても、やはり水口だけということやなしに、県下いろんなロータリークラブでございます。そういうふうな複数のロータリークラブと合同でやるというふうな方法も考えられるんじゃないかなというふうにも思っております。そうすれば、また違ったやり方でできるん

ではないかなというふうにも思っております。

それからもう一つ、これもサッカーなんですけれども、水口クラブは韓国のプーチョンロータリークラブと姉妹提携を結んでおりまして、その地域の少年サッカーチームとのいわゆる親善交流試合も何回かやらしていただいております。ことしは韓国から来たんですけれども、ことし、たしか行ったり来たりで3回目になると思います。これは地域の中でやるというよりも、やはり韓国の子供たちと日本の子供たちがサッカーをして、そして一緒に遊んで、一緒に食べて交流をするということの意義が大変大きいんじゃないかなというふうに思っております。

水口クラブが主催する少年サッカーの方は変わるかもわかりませんが、姉妹提携をしております韓国との少年との親善交流、これはやはり毎年というわけにはいきませんが、数年に一遍でも続けていけばいいんじゃないかなというふうには思っております。



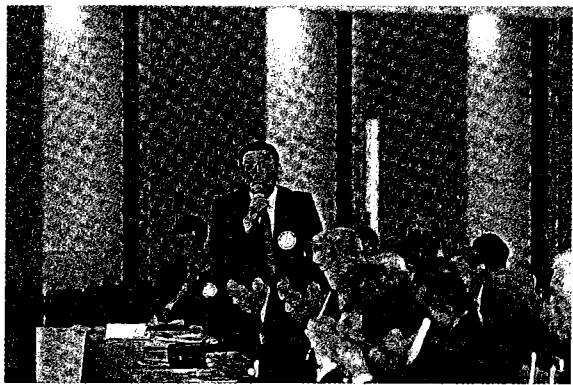
司会 ありがとうございます。

それでは、最後になりましたが、天津唐橋ロータリークラブの井野泰雄君が報告をいたします。

井野 きょうはパネリストの皆様方のご意見を聞かせていただきまして、ちょっと暗くなりました。私たちロータリーの中で、明るく子供を育てようという気持ちが非常にございます。やはり今明るく心豊かにするということで、一番大事なことではないかと思っております。天津唐橋クラブはできてまだ8年のクラブでございますけれども、4年前から、陶芸教室をしております。国際交流という名のもとにおきまして、ガールスカウト、地

域の子供たち、それから留学生、そしてフィンランド学校がごいますから、一緒に交流を年に1回やっております。この後、友愛タイムがごいますけれども、友愛タイムのところに、当クラブの作陶教室をいたしました作品が飾ってごいます。これはガールスカウトの子供たちや、そして地域の子供たちや、そして留学生の人たちが心を込めてつくっていただいた唐橋焼の作陶でございますけれども、作陶を通して、物をつくるという豊かな心をやはり私たち育てていくことが大事ではないかと思ひます。そしてまた、作陶教室が終わりましたら、フィンランド校の生徒と、留学生の生徒と、それから地域の子供たちが一緒にディスカッションをいたしまして、日本と外国との違いというのを子供たちにはっきりわかるように勉強させています。

今いろんな形でありますけれども、慈愛の種を播くということは、やはり慈愛の種を播いて水を与えて、肥料を与えて、花を咲かせることが一番大事なことだと思います。子供たちに大きな花を咲かせるということは、やはり温かい美しい慈愛の命の大切さというものを私たちが訴えていくこと、これが一番大切だと私は思ひます。作陶教室の作品を、子供たちがいつもテーブルの上に飾ってございまして、それを一生懸命大事にしているという、この言葉を聞きまして、私たちが小さなことでも本当に大きな花が咲くのではないかという意識を持っております。どうかまた作陶教室の作品見ていただいたらありがたいと思ひます。



司会 ありがとうございます。

これで計画いたしましたご発言はすべて終わりました。

パネラーの先生方、どうもありがとうございます。

最後に、パネリスト間で何かご討議、ご発言が最後にございましたらお願いいたします。

それでは、会場の中で、非常に時間がおくれますので、一方でもご質問をお受けしたいと思ひますが、どなたかございませうでしょうか。

どうぞ。

会場発言 失礼ですけれど、高橋先生にお尋ねしたいんですが、スポーツを通じていろんな青少年の指導をすると、一つの大きな命題だと思ひますが、例えば高校野球を見てますと、たくさんの応援団の中にユニフォームを着て応援してる子がおりますよね。あの人たちについては、スポーツの効果はどれほどのものがあるんだろうかと思ひますし、それからもう一つ、英才教育やっつる国はあります。例えばかつての東欧、ソビエト、ルーマニア等ですね。英才教育やっつオリンピックで金メダルを日本全国の金メダルを集めてもたった一人の人の金メダルに及ばないような、非常な英才教育をやっておりますけれども、そのとき金メダルを取ってよかったというのは、それはそれでいいんですが、その英才教育を受けた個人が将来、一たんちゃんとした体を持って長生きをするとか、そういうことあったんだろうかと、そういう疑問を私はいつも持つわけなんです。ですからマスとしてのスポーツと、個人としてのスポーツ、その辺が例えば滋賀県の体育協会、失礼ですけど、その点、どのような成果があるんだろうか、お聞かせ願ひたいと思ひます。

高橋 財津先生からどう答えていいかわからん、ご質問をいただいたんですが、スポーツですから、必ず勝ち負けがあります。優勝したチームでも、多分あれユニフォーム着てベンチに入れるのは15人だと思ひますが、あとの生徒はユニフォーム着て自分の同僚を応援しているということで、僕はああいう経験をしたことがないんで、どうように指導者の先生してるんかなというように思ひます。

ある学校の先生に聞いた話を少しさせていただきますと、50人ぐらい預かって、背番号を渡すのが15人、非常につらいそうです。50人預かって15人、あと35人は当たらないわけですけど、それはやはり学校の校章を一つでも光らすために努力していただく子供として受けとめてるというように監督は言っております。子供たちも多分15人に入りたいと思ひますが、なかなかスポーツの世界ですから、私も預かっている中で、やはり1番から順番につけますと、30人預かって、1番を30人つけれるわけにはいきませんので、1番つけたら30番をつけないかということ、指導者としては特に高校の先生、は本当に苦勞をしておられるのではないかと。やはり最近の指導者の話を聞きますと、ユニフォームを、背番号を渡すときが一番つらいというように聞いておるんです。僕も甲子園を目指したわけやないんで、その辺はちょっとそういう答弁しかできないんですけど、よろしくお願ひします。

司会 どうも非常に財津先生の質問が大き過ぎて、回答者も困っておられるようですが、時間がありましたら、また懇親会の席でも大いにディスカッションしていただければ幸いと存じます。

それでは武原先生にまとめの一言をお願いしたいと思います。

武原 私以外の4名のパネリストの方から、本当に専門的で独創的な青少年の支援活動についてのお話を聞かせていただきました。

また、県内4つのロータリークラブから日ごろのご活躍をお聞きして、大変心強く思ったところでございます。

今まで我が国の教育体制、特に学齢期の子供たちの教育体制は学校教育が中心でございましたが、今は学校教育と社会教育が一体化した生涯学習体制とも言われる、あるいは社会教育とも言われますか、そういうところの中で行われようとしているのですが、そういう学校教育中心からそうした生涯学習体制への移行が、公的、私的な、そして献身的、奉仕的ないろんな方の活躍の中で一步一步前進していることを痛感させられたということ

でございます。

今までの我が国の教育を考えてみますと、公的には国の経済発展、国力増強に役立つ人づくりをするということだったでしょうし、私的には立身出世して自分と家族の生活を豊かにするということを目的にしていたように思ひますが、現在の我が国の状況、あるいは国際的立場というものを見てみますと、知育を軽視していいということはありませんが、徳育、体育、知徳体のバランスのとれた人づくりを進めている。そんな中で、世界の平和、人類の福祉に貢献できる人間を育てていくことが大切なんではないかなと、そう考えますときに、学校と家庭と地域と、それから民間の有志の方々が、今後一層連携して子供たちを育成していくことが、非常に大切なんではないかなということをお自身改めてきょうは考えさせられたということでございます。

本日のパネルディスカッションがそれぞれの地域での慈愛に富んだ青少年の育成のために少しでも貢献することができたら、これほどうれしいことはないというふうに思ひます。

司会 どうもありがとうございました。

最後になりましたが、ゼネラルリーダーの財津晃先生に総評をお願いいたします。

財津 8月24日に第3組、京都のI.M.がありまして、そのときのテーマが、きょうが「青少年に慈愛の種を播こう」ということでしたけれども、京都の場合は社会「社会に慈愛の種を播こう」と話でございました。そのときのパネリストの一人が、社会に対して慈愛の種を播くということを考えるときに最も大事なものは、それはいろいろあるでしょうけれども、青少年のことを忘れてもらっては困るという話が出ました。全般的にいいますと、慈愛の種を播こうという、一見易しいテーマですけども、掘り下げてみれば、これほど恐ろしい奥の深い、しかも、幅の広い問題はなくて、特に青少年の場合はそういう感じがいたします。

きょう5人のパネリストの方からの話がありまして、それぞれの専門的なことを我々は考え

るわけにいかないので、やはり森定さんのおっしゃったロータリーとしての青少年に対応することは非常に大事だと思います。もちろんネイチャーゲームの話もございました。それから引きこもりの話、こういったことも青少年について問題となりますけども、これはやはり辻田パネリスト、それから西嶋パネリスト、それぞれの専門的な立場でないと、どうにもしようがないところがございまして、そういった問題もあるんだということを心にとめておく必要があると思いますけども、直接それに携わることはないと思っております。

申し上げましたように、非常に青少年の問題というのは奥が深く幅が広くて、しかも、これが青少年、特に学童、学生については、国家的な事業としてやっております、なかなか我々が参加するのは難しいことがあります。例えば武原先生がおっしゃいました週休2日でやっても、その内容、質を濃くして、トータルにおいては前と変わらないというお話がございましたけども、果たしてそうなんだろうかと私は思っております。

例えばもう一つ、話飛びますけども、現在、青少年の問題が非常に混乱しております。その中には、ある大きな要素は学校教育であると思うんですけども、戦後の50年間の学校教育というもの

が、恐らくどちらかというと、失敗の方に針が振ったために、現在の青少年問題は起こっておるということを考えますと、さらに50年先にどのような子供がどのような社会人になるのか、非常に難しい問題があると思います。その点につきましては、我々は社会人として注目をしていかなければならないだろうと思っております。

また先ほども、また繰り返しになりますけども、社会に慈愛の種を播くということと青少年に慈愛を播くということは非常に密接な関係がありまして、そういった点からいきますと、本日の青少年に慈愛を播くということと一緒に社会に慈愛を播く、これは我々は社会人として直接で身近なところはありますので、そういった面からも我々奮起が望まれると、こう思っております。

司会 どうもありがとうございました。

予定しましたより10分間オーバーいたしました。

これにて「青少年に慈愛の種を播きましょう」をテーマにいたしましたパネルディスカッションを終わらせていただきます。

パネリストの先生方初め、会場の皆様方のご協力により、何とか無事終了することができましたことを感謝いたします。

どうもありがとうございました。(拍手)